

# カツオ 中西部太平洋

Skipjack *Katsuwonus pelamis*



## 管理・関係機関

中西部太平洋まぐろ類委員会 (WCPFC)  
太平洋共同体事務局 (SPC)

## 生物学的特性

- 最大体長・体重：尾叉長 100 cm・25 kg
- 寿命：6 歳以上
- 性成熟年齢：約 1.5 歳 (50%性成熟年齢)
- 産卵期・産卵場：表面水温 24℃以上の海域
- 索餌期・索餌場：表面水温 15℃以上の海域
- 食性：動物プランクトン、魚類、甲殻類、頭足類
- 捕食者：マグロ・カジキ類、サメ類、海鳥類等

## 利用・用途

缶詰や節原料、刺身・たたきによる生食

## 漁業の特徴

1950年代から1970年代までは主に日本の竿釣りが中心で漁獲量が伸びていった。1980年代にはいと、漁場の拡大に伴う活餌保持の問題と燃油高騰等の経済的要因から遠洋竿釣り漁船数が減少し、竿釣り漁獲量の伸びが停滞した。竿釣りの漁獲量は、1980年代後半以降は緩やかに減少している。1980年代には各国のまき網船による熱帯水域漁場の開発が始まって漁獲量の急増期に入り、以降現在までまき網の漁獲量は増加している。竿釣りは、2005年頃まで日本が約6割を占めていたが、次第に減少し、2006年以降はインドネシアが最も漁獲量が多くなり、近年の日本が占める割合は約4割になっている。まき網については米国、韓国、台湾及び日本の遠洋漁業国・地域が近年の漁獲量の5割を占め、他はパプアニューギニア、インドネシアが多い。

## 漁獲の動向

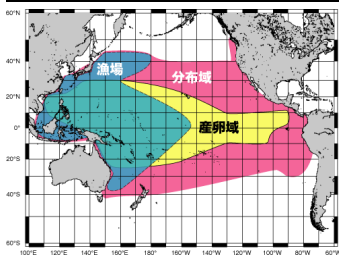
漁獲量は、主に竿釣りにより、1960年前後には10万～17万トン、1970年には20万トンを超えた。1970年代後半には竿釣りが30万トンを超える水準となり、全体では40万トン台となった。1980年代以降はまき網による漁獲量が急増し、1990年代には100万トン前後に増大、さらに2009年には180万トン近くに達したが、2011年にかけて減少した。その後再び増加に転じて2014年には約200万トンを記録し、2015～2017年は減少したが、2019年は約204万トンと過去最高に達した。2021年の漁法別漁獲量(暫定値)は、まき網が132.8万トンで81.7%、竿釣りが14.6万トンで9.0%、その他の漁業が15.1万トンで9.3%であった。2021年の国・地域別漁獲量は、インドネシアが27.2万トンで最大で、日本20.4万トン、台湾17.3万トン、韓国16.0万トン、パプアニューギニア10.1万トンであった。日本近海での2021年の漁獲量は、近海竿釣り約3.0万トン、北部まき網2.6万トンであった。

## 資源状態

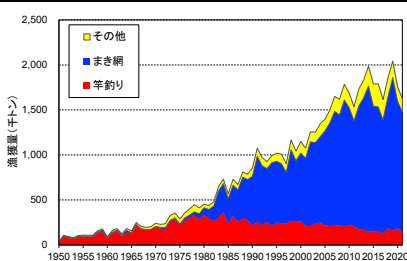
中西部太平洋のカツオの最新の資源評価は、2022年のWCPFC科学小委員会にてSPCの専門家グループにより統合モデルのMultifan-CLを用いて実施された。評価期間は1972～2021年、海域区分は8海区とし、漁獲量データ、努力量データ、体長組成データ、標識放流再捕データを入力して、タグの混合期間、成長式、親子関係の不確実性を考慮した「グリッドアプローチ」による18モデル(18通りのシナリオ)で資源評価が実施された。なお、18のすべてのモデルに対して同じ重み付けとし、その中央値を資源評価の参照値として算出した。推定されたカツオの産卵親魚量は1980年代中頃から2000年代中頃まで緩やかに増加し、その後減少傾向を示し、近年(2019～2021年)の産卵親魚量は過去最低値付近にあることが留意された。推定された漁獲係数は成魚、未成魚ともに増加傾向を示し、2020年は最大に達した。最近年(2021年)の産卵親魚量は、漁獲がなかったと仮定して推定された産卵親魚量の約46%であった。近年(2017～2020年)の漁獲率はMSYレベルを下回り( $F_{\text{recent}} / F_{\text{MSY}} : 0.32$ )、かつ産卵親魚量がMSYレベル(265万トン)を上回っていることから、資源の状態は、乱獲状態でも過剰漁獲でもない評価された。ただし、産卵親魚量が2000年代後半から減少傾向である一方で、成魚と未成魚の漁獲死亡が継続的に増加していること、さらに近年の減耗率(漁獲がなかったと仮定した産卵親魚量に対する実際の産卵親魚量の割合)が歴史的な低水準であることが留意され、主な原因は熱帯域のまき網漁業と西部太平洋のその他の漁業による影響が大きいとした。

管理方策	
2022年のWCPFC年次会合でカツオの管理戦略評価を用いた漁獲戦略について議論が行われ、目標管理基準値を漁業がないと仮定して推定した産卵親魚量の50%とすること、さらに漁獲管理ルールを含む管理方式に合意した。メバチ・キハダ・カツオの保存管理措置は、2021年に見直しを実施され、現行の措置を2023年まで継続することとなっている。主な措置の内容は、まき網漁業によるEEZ内、公海域FAD禁漁期間はそれぞれ3か月と5か月、公海操業日数制限は先進国に加え、島嶼国がチャーターする船にも適用、FAD数制限を1隻あたり常時350基以下とすること等である（FAD操業規制はメバチ幼魚死亡率削減を目的とするが、本種にも影響を与えている）。	

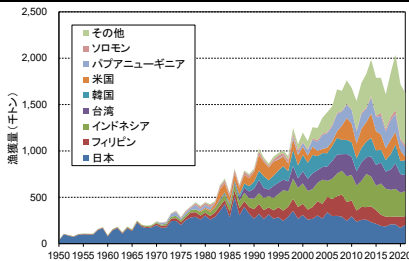
カツオ（中西部太平洋）の資源の現況（要約表）	
資源水準	高位
資源動向	減少
世界の漁獲量（最近5年間）	161.5万～204.2万トン 最近（2021）年：162.5万トン 平均：177.7万トン（2017～2021年）
我が国の漁獲量（最近5年間）	17.0万～20.9万トン 最近（2021）年：20.4万トン 平均：19.5万トン（2017～2021年）
管理目標	漁業がないと仮定して推定した現在の資源量の50%とすることが2022年のWCPFC年次会合で合意されている
資源評価の方法	Multifan-CL
資源の状態	最近年（2021年）の産卵親魚量は、漁業が無いと仮定した場合の約46%程度である。資源は適度に利用されているが、産卵親魚量は過去最低値付近にあり、漁獲圧は増加傾向にある。
管理措置	2022～2023年のメバチ・キハダ・カツオの保存管理措置；まき網漁業によるEEZ内、公海域FAD禁漁期間はそれぞれ3か月と5か月、公海操業日数制限は先進国に加え、島嶼国がチャーターする船にも適用、FAD数制限を1隻あたり常時350基以下とする。
最新の資源評価年	2022年
次回の資源評価年	2025年



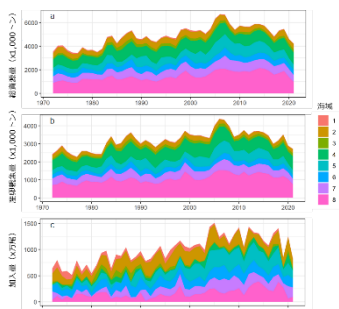
太平洋におけるカツオの分布域、産卵域及び漁場



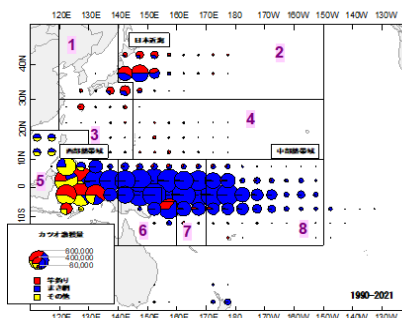
中西部太平洋におけるカツオの主要漁法別漁獲量の推移（1950～2021年）



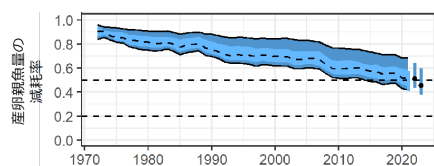
中西部太平洋におけるカツオの国・地域別漁獲量の推移（1950～2021年）



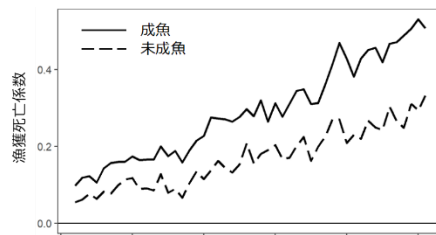
各海域における資源量推定値（1972～2021年）  
 (a) 総資源量、(b) 産卵親魚量、(c) 加入量



中西部太平洋におけるカツオの漁法別漁獲分布（1990～2021年）  
 赤：竿釣り、青：まき網、黄：その他



産卵親魚量の減耗率（産卵親魚量／漁獲がなかったと仮定して推定された産卵親魚量、1972～2021年）  
 点線：限界管理基準値0.2（上）、目標管理基準値0.5（下）



推定された成魚と未成魚の漁獲死亡係数（1972～2021年）